

よろず支援拠点だより <59>

健康果実に転換しブランド育成へ

わかやま新報の読者の皆さま、こんにちは！

和歌山県よろず支援拠点チーフコーディネーターの鶴田です。「営農」という言葉があります。農業を単なる作業としてではなく、売り上げを上げて継続していく経営という面からとらえた言葉です。今回ご紹介する紀伊路屋合同会社の長谷光浩社長はまさに営農という言葉がぴったり当てはまる相談者です。

に転換されて以降、「猿に食べられず、機能性があり、皮も加工でき、捨てる場所がない」と語っておられます。

長谷社長は広川町でかんきつ栽培を行っている農家の3代目です。主力商品は有田では珍しいジャバラで、15年ほど前に農地の半分を温州みかんから作付け転換されました。長谷社長はジャバラ

す。当拠点ではジャバラがブームになり、売り上げが伸びて出荷作業が追いつかなくなったときにAmazonへの販売委託を提案するなど支援を行ってきました。

目下の課題としては、一つはインターネットを活用した情報発信です。安心安全にこだわり、自ら「広川町じゃばら組合」を主宰されるなど農業にまつわるコンテンツを豊富にお持ちなので、それを使ったさらなるファンの獲得です。

もう一つは次なる戦略商品として栽培中の「かんきつ中間母本農6号」の販売。これはおいしくて、香りがよくて、機能性に優れているというまさにスーパーかんきつ。これを自社だけではなく、和歌山のブランドとして育成

したいとその思いを熱く語られています。

「有田みかん」というブランドに頼ることを良しとせず、未知の果物の可能性にかけた長谷社長の当時の決断に思いをはせつつ、やはり勇気こそが経営なのだと思えたのでした。

和歌山県よろず支援拠点
和歌山市本町二丁目1番地
フォルテワジマ6階
URL <http://yorozu.yarukiouendan.or.jp/>
TEL 073・433・3100

